

## 近世日本における華佗像

伊 丹

早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

華佗（また華陀、華他）は中国後漢末期頃の名医である。またの名は粵、字は元化、沛国譙の人である。養生の術や外科手術にすぐれており、「五禽戯」を創案した。曹操の侍医となったが、その怒りに触れたため、殺されたという。華佗の伝記は『後漢書』巻八二下・方術列伝第七二下「華佗」、『三国志』魏志巻二九・方技伝第二十「華佗」などにあるが、後世の類書など多くの書物にも散見される。

従来の研究では、華佗の名前、著書などが議論されてきたが、この中国の名医のことが、日本の書物や絵画では具体的にどのように描かれており、また、そこに現れる認識はどのような書物を経て広がっていたのかについては、まだ注目が少ない。従って本発表は、近世以前の華佗関係の記録を整理したうえで、文字テキストと図像という二つの面から、近世における華佗関連の資料を考察する。これらの検討を通して、日本、とりわけ近世における華佗像のあり方を明らかにし、近世における知識伝播の側面、また医学と文学との関係を考えてい。

華佗に関する記述は早く日本に伝わり、例えば『万葉集』巻五、山上憶良「沈痾自哀文」には華佗の名が挙げられており、注釈には紹介がある。『蒙求』にも「華佗五禽」とあり、後に『蒙求聴塵』や『蒙求抄』があるように、講釈や抄物などを通じて伝播してきたと窺える。医学関係の書物では、鎌倉後期の『医談抄』『医家千字文註』にも見られるが、近世以前、華佗に関する伝承は正史における記述を中心に受け継がれてきたことが確認できる。

近世においても『蒙求』関係の書物や類書などには華佗についての情報は多数あるが、注目しておきたいのは、『三国志演義』関係の書物である。先述の通り、『三国志』魏志には華佗の伝記があるが、とりわけ明代の『三国志演義』には、「孫策大戰敵白虎」「関雲長刮骨療毒」と「曹操殺神医華佗」において華佗の話が詳細に描かれており、挿絵も付されている。関羽の矢傷の療治をはじめとする描写は、正史には見られない一方、医学書を含め、日本近世の書物に多く継承されてきた。

『三国志演義』の流れをくむ日本近世の書物は十以上もあるが、その内、華佗の記述が確認できるのは、湖南文山の読本『通俗三国志』（1689）、鳥居清満の黄表紙『通俗三国志』（1760）及び池田東籬作、葛飾戴斗画の読本『絵本通俗三国志』（1836～1841）である。そのテキストは何れも『三国志演義』によるところが大きいが、華佗の神業を称えるためか、『三国志演義』に見られないほかの診療譚も複数取り入れられた。

また、図像をみると、『三国志演義』の複数の版本は何れも冠を被り、黒髪、八字ひげとあごひげが生えた華佗である。このようなイメージは、中国の医学書『図像本草蒙筌』などにも窺え、『後漢書』『三国志』の「暁養生之術、年且百歳而猶有壯容、時人以為仙」という記述に依拠したものと推測される。一方、上述した日本近世の書物においては、華佗はゆったりとした衣を着て、長い頭巾を被っている姿が見える。これはおそらく『三国志演義』の「柵巾異服、臂挽青囊」によるもので、さらに葛飾応為「関羽割臂図」（1840頃）や歌川国芳の錦絵「華佗骨刮関羽箭療治図」（1853頃）など彩色の絵画においては、華佗は長い白髪になっている。このような形象は『三国志演義』の「童顔白髪、飄飄然有出塵之姿」に基づくものと考えられ、日本の医学書『医仙図贊』（1686）にも似たようなイメージが窺える。

名医として名を馳せる華佗であるが、日本近世の書物ではその神業を語る話が増加され、さらに白いひげで頭巾を被った形として造型されたものが多い。かかる『三国志演義』に基づく描写は、医学書も採用した。近世における華佗のイメージを検討するには、医学書の記述や、当時の流行だった『三国志演義』関係の書物との関わりも念頭に置きつつ進めるべきであろう。